

スタジオ夜話

第84話 スタジオ夜話

「音の良し悪し」音質への取り組み（Ⅱ）

何が良い音、良い録音？

☆ はじめに

世の中大変なことになっています。暖冬の影響で桜の開花が・・・なんて悠長なことを言われる状況ではありません。

変な病気が世界中で流行っています。もはや地球はパンデミック状態です。読者皆様も気を付けてといったところで、防ぎようはありません。うがい手洗い、体調を管理して、自己免疫力を高めるしか手はありません。

気を付けるのではなく頑張りましょう！と自らにも言い聞かせています。読者皆様も自己免疫高める頑張りを！！

さて今回のスタジオ夜話は、「音の良し悪し」音質への取り組み（Ⅱ）です。

何が良い音、良い録音？スタジオ夜話的にお話します。お付き合いよろしくお願いたします。

☆スタジオモニタリングを考える。

モニタリングでの聴き方聴かれ方

スタジオモニタリングシステムを検証しながらお話します。既に読者皆様はモニタリングとは何か？については、十分に承知のことと理解していますが、もう一度ここで確認しておきます。

スタジオでのモニタリングとは「お客様に良い音を提供するための重要な作業の一つである」スタジオ夜話的に表現しなくとも、その通りだとご理解いただけるものと思います。モニタリングシステムとはそのためのシステムです。ではディレクターやエンジニアはそのシステムで何をモニターしているのか検証してみましょう。

「モニタリングで確認？する音」(Ⅰ)

何をモニタリングするの？

収録時にもトラックダウンの時もその目

的によってモニタリングする音は様々です。

目的とはどんな商品？を創るのか。から始まります。ここで収録環境や収録機材、スタッフなどが決まります。ディレクターやエンジニアにもそれぞれ得意とするものがあり、あえて不得手なジャンルには手を挙げるとは思えません。また収録環境もオーケストラ、弦楽四重奏、ピアノソロなどをスタジオで収録するのか、ホール収録なのかで随分と違います。目的に合った収録環境収録機材、スタッフが決まったらいよいよ作業開始です。スタジオ収録を例に話をすすめると、エンジニアは収録スタジオを決めます。目的に合わせた規模や機材の選定です。スタジオ内の楽器の配置やマイクロフォンの選定や設置場所などもここで決めていきます。

マイクロフォンがセッティングされいよいよ収録がはじまります。(収録とトラックダウン作業では実際には作業が異なりますがモニタリングの目的は同じなので、ここでは分けてお話ししません。)

さて最初にモニタリングする音は、マイクロフォンの入力音です。エンジニアの経験値にもよりますが、ここで目的にあったマイクロフォンの選択と設置位置などのアレンジが決まります。マイクロフォンインプットを切り替えて、モニタリングして確認します。複数マイクロフォンでのマルチ収録に対応するためには、このインプットをモニタリング出来ないとマイクロフォンの個性をチェックする以外にも他の楽器のカブリなどがチェック出来ません。

コンソールのインプットソロのモニタリングです。ここでは概ねマイクロフォンでの収音状況と音質をチェックすることになります。モニタリングする音の種類(インプットモニタリング)です。コンソールに入力された音はこの後コンプレッサーやイコライザーなど様々なエフェクトが加わり

ます。

モニタリングはその都度エフェクト前と後を確認する必要があります。かつてのアナログコンソールではモニタリング回路が複雑になるため、多くのポイントでのモニタリングは望めませんでした。最近のデジタルコンソールでは様々なルーティングを自由にセットアップができ視覚的にもどこのポジションをモニタリングしているのか液晶ディスプレイで確認できるようになりました。

またマルチでのモニタリングではパンポットやイコライザーなどを介したモニタリングも出来、ソロスイッチを押すことによりチャンネルを加えてゆくモニタリングも可能になりました。

互いの楽器の位置関係も確認できるモニタリングです。こうしたモニタリングを自由なポイントで、できる仕掛けを筆者は(インサートポイントモニタリング)と勝手に呼んでいます。またメーカーにも呼び方はちがいますが、パンポットなどの定位関係をモニタリングするソロ回路を(ポジションソロ)というメーカーもあるようです。

このようにモニタリングは作業目的に必要なコンソール上の各ポイントで様々に行わなければなりません。かつてのアナログ時代、筆者はスピーカーを一台別回路に接続してパッチケーブルでモニタリングしたいインサクションポイントに接続してモニタリングしていました。モニタリングは良い音を創るための重要な作業です。

「モニタリングで確認？する音」(Ⅱ)

良い音を収録するモニタリングとは？

モニタリングシステムの検証を続けます。始めに収録などの作業時にどんな音をモニタリングするのかお話ししました。良い音を提供するためのモニタリングとそのシステムです。次にモニタリングに大きな影響が

あるシステムやスピーカ、その配置などモニタリング環境についてのお話です。

「良い音、好い音」のポイントがここにあります。概ね録音スタジオにはどんな目的で作業するスタジオなのか、基本的なコンセプトをもって設計されているということです。

この段階では「良い音」と「好い音」の曖昧な部分も見え隠れしています。設計担当者の思い入れがスタジオ設備などに反映されています。もっとも担当者はプロフェッショナルです。ハイエンドユーザーやオーディオ評論家のような偏った思い入れをすることはないと信じています。こうして設計されたスタジオのモニタリング環境をみてみましょう。

大手のレコード会社のスタジオではスタジオの建物、機材などに多額の資金を投入しています。

一方で資金に余裕の無い小さな企業では、設備に多額の費用を導入できません。以前筆者が勤務していた環境ではメインの録音スタジオはスチューダー製のコンソールにジェネレックのモニターというそれなりのグレードを持つスタジオと、ヤマハ製のコンソールにJBLの2WAYモニターといったメインスタジオと比較すると費用面で20分の一以下の設備のスタジオがありました。

それなりの設備を有するスタジオの方が「良い音」が録れるのでしょうか、筆者の実体験としてどちらのスタジオで収録しても互いに聞き比べた結果、収録作品に優劣はつけられませんでした。当然のことですが両者とも同じ素材を同じエンジニアが収録したものです。

もちろん出来上がりの音は両者で異なりましたが、優劣には影響しませんでした。つまりどちらも「良い音」であったという結論です。モニタリングはユーザーに「好



い音」で聴いてもらうために「良い音」の収録を目的として行う作業です。そのためのモニタリングシステムは高級なシステムに越したことはないのですが、それは重要な要素ではありません。

世の中のエンジニアの中にはA社のモニタースピーカは「良い音」だという方がいらっしゃるかもしれません。確かに「良い音」なのでしょう。しかしこのエンジニアの方はB～Z社のスピーカでは「良い音」が収録できないのでしょうか？

多くのエンジニアの方たちは「良い音」でモニタリングしているのではなく「良い音」を創るためのモニタリングを様々な環境で行っているのです。

よく言われていることですが、自分のお気に入りのソースを数種類用意して様々なモニタリング環境で試聴することも時々行うことをあらためてお勧めします。

☆スタジオでのモニタリング

「良い音」を創るための検証結果

ユーザーは極めて趣味的に「好い音」を求め追及していきます。ハイエンドなユーザーはアンプやスピーカにそれぞれ100万円以上の資金を使っています。趣味です

から問題はありません。一方プロのエンジニアは様々な条件の中でユーザーが「好い音」で楽しめる「良い音」を創る仕事をしています。そのためのシステムは高価な録音機器が必ずしも必要なわけではなく、目的を持った収録が可能なモニタリングができる仕掛けが必要だということ。その仕掛けとは設備の優劣の問題ではなく、エンジニアとしての取り組み方でありそれが「良い音」を創るのです。

☆次回は

「音へのこだわり」(Ⅱ) おかしな話、スタジオ夜話的なエピソードをお話します。

効果音創りで苦労した話や、PC導入時のエピソード、信じられない「音」に関する話です。楽しみにしてください。冒頭でウイルスの話をしました。季節は春、そして新入学や会社なども新入社員が入社してきます。読者の皆さまもウイルスなどに負けず健康管理に気を付けてください。

ウイルスなどの侵入社員はお断りです。次回もスタジオ夜話よろしくお願ひいたします。